

シマ de シンポジウム(座談会編)

糸満ハーレー×しまくとぅば

特別インタビュー

糸満市の二大伝統年中行事の一つ、糸満ハーレー。毎年旧暦5月4日のユッカヌヒーに、大漁祈願と航海安全を祈願して糸満漁港中地区内で行われる。

糸満ハーレーは、古い集落である「西村」「中村」「新島」の3村に分かれて競い合う。種目には、神事性を重んじる競漕の「御願バーレー」、次世代を担う青年を育てるための「青年バーレー」、レース途中で一度舟を転覆させ、再び起こした舟に乗り込んでゴールを目指す「転覆バーレー」、そして選りすぐりのシンカ(漕ぎ手)たちによる「アガイスープ」などがある。「アガイスープ」での勝利は最高の名誉とされ、賞賛される。

各村のハーレー舟(=サバニ)には12人(舵取り1人、漕ぎ手10人、鉦打ち1人。御願バーレーにはさらにデーフィ(旗振り役)1人が加わる)が乗り込む。中でも漕ぎ手の一番エークと舵取りは重責で、「この2人で勝敗が決まる」とさえ言われる。シンカの選抜や漕ぎ方の指導などは各村によって異なる。

今回は新島南区で監督経験のある与那嶺和直さん(60)に、自身が見てきた糸満ハーレーの歴史や、現在の糸満ハーレーについて感じていること、そして伝統継承のために現役選手らに求めることなどを聞いた。

さきやま まさみ
インタビュアー：崎山 正美

糸満市出身。風水舎 代表取締役

よなみね かずなお
■与那嶺 和直 行事委員会参与、新島南区元監督

糸満市出身。昭和35年11月生まれ。糸満中学3年生のとき、中学生バーレーに新島の一番エークとして出場した。その後、青年バーレーやクヌカセー(転覆バーレー)、アガイスープ、御願バーレーと、全ての本バーレー競技に一番エークやトゥムヌイ(舵取り)として出場した。

与那嶺和直(以下、与那嶺)…私の出身村は、新島です。新島は20~30年ほど前、南区と前端区の2に分かれていました。それが一つになり、新島になりました。以前はハーレー舟にも、南区と前端区と書いてありました。かつて



は各漁村に、浜がありました。「ヒラグワー」と言っ
て、サバニをあげるところがあったんです。新島の場合、メヌハマ、ナカノハマ、そしてウーバマという広場でした。南区の場合はメヌハマとナカノハマ、前端区はウーバマだったと聞いています。

崎山) 与那嶺さんは、父親の時代から糸満在住ですか。

与那嶺) 私は八重山生まれです。小4まで八重山で育ちました。母親は糸満の赤比儀腹。父親は山原出身です。

崎山) 与那嶺さんが糸満ハーレーに関わるようになったのはいつですか。

与那嶺) 舟を初めて漕いだのは、糸満中学校の3年生の頃です。中学生バーレーですね。そのときに一番エークをして1位になり、翌年から青年たちと練習していました。

崎山) 与那嶺さんが若い頃、漕ぎ手の選抜はどうしていましたか。

与那嶺) 中学生バーレーは、中学3年生を各区から選抜して3村で対抗させていました。中学生バーレーから力のある人が優先的に選ばれます。舵取りは、海人の先輩たちでした。

崎山) 御願事について。与那嶺さんが若い頃と比較して、今の御願事についてどう感じますか。

与那嶺) 自分は漕ぐ練習に一生懸命で、実際の(御願事)を見ていないんです。新島南区の場合は、区長や海人が一緒に御願しに行って、その報告していました。

崎山) ハーレー歌は、誰が歌っていましたか。

与那嶺 御願バーレーのデーフィ（旗振り役）というのがいます。誘導役です。デーフィや、トゥムヌイ（舵取り）、現役の海人ですね。いまもハーレー事は盛んですが、私は（現在の）ハーレー歌を聞いて、「ちょっと違うな」という節もあります。ハーレー歌は、一週間ぐらい前から各村で練習するんですよ。普通は全然歌いません。

崎山 いまの若い監督たちには教えていますか。

与那嶺 各村によって（指導方法などが）違います。いまの監督も、歌詞を見たら歌うと思いますよ。ハーレー歌は転覆競漕や中学生バーレー、青年バーレーでは歌わない。アガイスーブでは歌うので、漕ぎ手は歌えますね。

崎山 『「西村や むとうぎ（親）」、「中村や なしぐわ（子）」、「華ぬ新島や んまが（孫） でびる』』という言葉がありますが、これは台詞ではなく、歌詞でしょうか

与那嶺 歌詞にはありませんね。（糸満の広がりについて）ヌン殿内（糸満のヌルの家）から西村、次に中村に広がり、新島が最後だったそうです。

崎山 糸満の発展を表したわけですね。

与那嶺 そうです。

崎山 次の世代を指導し出したのはいつ頃ですか。

与那嶺 私がリーダー格になったのは、20歳そこそこでした。当時、先輩たちが勝負に負けたんです。切り捨てられてしまい、その後リーダーを任されました。全然分からない状態で選手をまとめました。最初の2～3年は勝てませんでした。

崎山 アガイスーブは何周もしますよね。その勝負を、トゥムヌイの技術で勝つ場合がある。トゥムヌイはどういう人が任されますか。

与那嶺 ほとんどが一番エークをした人だと思います。私もそうでした。（そのときの一番エークに）漕ぐ体力がなくなったり、トゥムヌイが辞退したりしたら、一番エークが引き継ぐ形だと思います。

崎山 漕ぎ方について聞かせてください。

与那嶺 私が中学生バーレーに出場していた時代は、「ハニヤーエーク」と呼ばれる漕ぎ方がありました。櫂（かい）を上を上げて、鳥が羽を開いて飛ぶような漕ぎ方です。しかしあまりにも櫂を上げると、ペースが遅くなってしまいます。だから（早さを重視するようになってからは）ピッチ走行がいいよとなり、今現在は

なくなりました。今はスピード重視のピッチ走行で、あまり櫂を上を上げない走法を取っています。水面ギリギリで（櫂を）返す。4年ぐらい前、議論があったんですよ。ベテランが苦言を呈す場面もあった。村の青年たちからもいろんな意見が出て、結果的に昔の漕ぎ方をすこし戻そうとなり、2～3年前からすこし戻ってきました。

崎山 競争の中でも？

与那嶺 そう。エークの返し方で（早さが）変わるんですよ。「ハニヤーエーク」は本当に鳥が羽ばたいているようだった。昔はもう一つ、「スンカーエーク」という漕ぎ方もあった。舟のそば、前から（櫂を）入れて、後ろまで引っ張るやり方でした。

崎山 「スンカーエーク」は現在もありますか。

与那嶺 西村がたまにやりますね。「ハニヤーエーク」は波が立たないところでやると、ものすごいスピードが出るんですよ。波が立っているところで「ハニヤーエーク」をすると、海水が中に入ってくるからできない。だから、波があるところは「スンカーエーク」で漕ぎました。

崎山 与那嶺さんが若い頃といまのハーレーは、何がどのように変わっていますか。

与那嶺 私は変わっていないと思います。先輩からの伝統、やり方、仕組みが全然変わっていない。強いて言えば、漕ぎ方がすこし変わりました。（現在の）糸満ハーレーには、ルールがあります。以前は暗黙のルールに則っていましたが、青年たちが「ちゃんと決めよう」となり、かたくなに守った。エークの形、寸法も全部決めました。昔は一番エークのエークの長さとかは、各村で決めていたんですよ。今は統一しています。

崎山 糸満ハーレーは未来永劫続く。その糸満ハーレーに望むことはなんですか。

与那嶺 青年に一番望むのは、舟を大切にすることです。舟を造るサバニデークも、ほとんど年を取りました。現在あるサバニを長持ちさせるしかない。伝統をかたくなに守ってほしいです。

崎山 伝統を守るには、特にどういうことに気をつけるべきでしょうか。

与那嶺 御願事でも何でも、率先して自分も（現場に）行って、見る。現場に行って見ないと何も始まりません。漕ぎ方でも何でも、先輩たちの漕ぎ方をかたくな

に守ることが一番ではないでしょうか。伝統という意味は、伝えるということですよ。統一したものを伝えるという意味。これを崩したら駄目です。糸満ハーレーはいまも旧暦でやっています。これは絶対に守るべきです。

崎山) 中には(人が集まりやすい)日曜にやろうという声もあります。

与那嶺) それは絶対に駄目です。いまのやり方だったらそのままの状態ですでできると思います。

崎山) いまの若い監督たちは伝統を守っていきそうですか。

与那嶺) はい。監督をやるにも、現場でいろんなことを学ぶ人にしかできません。積み重ねた人ができる。最低でも20年~30年ぐらいでしょうか。そうすると行事に対する熱が出てくる。最後に残った人間が監督になります。

崎山) 今日はありがとうございました。



*追加インタビュー 取材者：嘉数

嘉数) 糸満ハーレーの漕ぎ方や歴史を子供達に指導する際、方言が通じなくて困ることはありますか。

与那嶺) ありません。基本的には標準語を使って話しますが、「ハーレー用語」などは方言のままです。意味が通じないことはありません。例えばエーク(=櫂)と言った場合、子供達はそれが櫂であることを知っています。ただ漕ぎ方についての方言名は、最初は通じないことがあります。「スンカーエーク」や「ハニヤーエーク」です。言葉自体は知っていますが、どんな漕ぎ方なのか分かっていません。私たち世代はやったことがある、または見たことがあるからわかりますが、若い子たちは「聞き覚えがある」という程度です。だから練習を通して教えていきます。ハーレー練習の時期になると、どこの舟からも「次はスンカ

ード!」という掛け声が聞こえてきます。スタートはピッチを上げて、舟が走り始めたら「スンカード!」と、指導者が大きい声で指示している声です。ハーレー用語以外のしまくとぅばも、指導に熱が入ると沢山出てきます。たとえば「前から」というのも、「めーから」と言います。「くさーまで」と言うのは「後ろまで」。「エーク けーしよー(エーク返して)」等。練習を通して、自然としまくとぅばを覚えていきます。

しまくとぅばではないですが、糸満ハーレーについて、間違った解釈が流れている事があります。それもその都度、指導するときに修正しています。たとえば「FM たまん」(地元のコミュニティラジオ局)の宣伝です。ハーレーの時期の宣伝で、「鉦に合わせて漕ぎ手が漕ぐ」という解釈でよく話をしているが、あれは間違っています。漕ぎだすのは鉦の音が合図ではありません。一番エークが潮(海中)に入ってからがスタートです。どこから聞いた情報なのかと不思議に思っています。ペースを作るのは一番エークです。ペースが遅いと、「なーひん(もっと)あぎらに(上げて)」という言葉が飛びます。舟に乗っている漕ぎ手について、御願ハーレーにだけ乗るデーフィ(旗振り役)がいます。デーフィはほとんどの場合、年方がやるとどこの村でも決まっています。一番エークがピッチのコントロールをしますが、舟で最も経験値が高く、全体のリーダーとして立ち振る舞うのはトゥムヌイ(舵取り)です。舵取りは技術的な側面から、年長の経験者しか務めることが出来ません。戦術的な話になってきますが、舟を走らせるためには、漕ぎ手の左右の体重バランスなど細かい調整が必要になってきます。当然、左右の力のバランスも合せなければなりません。例えば太っている人は集発力がありますが、クンチ(体力・持久力)はありません。しばらくすると疲れてきます。痩せたカジグテー(痩せた筋肉質)もいます。力と体重バランスを左右で取るのはとても難しいのです。どうしても少しの差が出てきます。そしてその差は、舟の走り方に影響してきます。スピードだけでなく、まっすぐ走ることもできなくなります。ただ、少しの傾きはトゥムヌイがコントロールできます。長く経験を積んだからこそ、どこがどれくらい傾いているか感じ取ることが出来るのです。明日から「トゥムヌイやって」といってできるも

のではないから、どの村でも漕ぎ手として長く漕いだ人が就任するはずで

嘉数 ハーレー舟は、代々同じ舟を村の中で受け継いでいるのですか。

与那嶺 昔と現在で、使う舟の事情が大きく変わっています。サバニは全く同じ規格で造っても、その中で良く走る、つまりスピードが出る舟が生まれます。漕ぎ手の技術を全部抜きにしても、規格は同じなのに優れた舟が出てきます。昔は、3艇ある舟を、1艇ずつ1年交代で回して使っていました。不思議なことにどこの村に行っても強い舟がありました。どこにいても勝つのです。村が変わっても、9~10連勝したそうです。それがきっかけで、「もらいこみ」という制度が始まったと聞いています。交代で使うのではなく、同じ規格で造られた舟を各村がもらい、ずっとその舟を使います。船大工は大城のおおさんと言う人で、あの方が相当数造ってきました。大城さんは見事に同じ寸法で造ります。それでも木の材質などで、走る舟がでてくるようです。連勝した舟は、今もどこかに残されていると聞いていますが、場所はわかりません。「もらいこみ」になってからは、15~20年近く経つはずで

嘉数 糸満ハーレーは「御願に始まり、御願に終わる」と言われています。神事をするノロは各村にいるのですか。

与那嶺 大里ノロはいますが、糸満ノロはもういません。ハーレー歌にもありますが、ハーレーをするにはまず、ノロに赦しをもらいます。現在も大里ノロに報告しています。世襲制で、今は男性がノロをしています。糸満はヌン殿内(糸満のノロの家)にいましたが、子が居なかったために、現在は不在です。昔ノロがしていた儀式を見ていた人が、ハーレーシンカに教えて続けています。

昔、白銀堂(イービンメー)で、ノロが漕ぎ手に杯(さかずき)をやる儀式を見ました。御願バーレーが終わった後、報告に行った時の事です。白銀堂(イービンメー)に降りて行って、ノロが一番エークとトゥムヌイに「入りなさい」と言って、杯を交わしていました。アガイスブの後にはヌン殿内(糸満のノロの家)で、糸満ノロが漕ぎ手みんなを座敷に上げて、一人ずつ杯をあげていました。御願バーレーの後の杯は、今も続いています。

嘉数 儀式について。神事ごとという観点から、漕ぎ手以外は見る事ができないのですか。継承が難しいのではないですか。

与那嶺 漕ぎ手が杯を受けているところや、ハーレー歌を歌いながらヌン殿内に行く様子は近くで見ることができ

ます。当然、子供達も見ることが出来ます。儀式があることについて、自分たちから積極的に広報する事はありません。当たり前のことを、漕ぎ手たちは粛々とやっているだけです。わざわざ「奉納しに行くから見においで」とは宣伝しません。見に来た場合は、「神事ごとだから子供達は中に入れない」という事も絶対にしません。儀式は言葉で説明して継承するより、見て厳かな雰囲気を感じながら、理解してもらうものです。2~3人程度は先輩について行って見ている中学生や青年はいます。こういった人間が儀式も継承していくでしょう。伝統というのは、「正当な事を伝える事」だと思います。子供達に神事ごとを継承するには、直接見て雰囲気を感じて、理解してもらう以外にありません。自主性にかかっています。神事ごとを教えるのは、言葉だけで広めることはできません。**嘉数** 開催日を旧暦にこだわる理由も、「伝統」であるからですか。

与那嶺 旧暦は沖縄の文化です。糸満ハーレーは旧暦の決め事だから、旧暦のその日が、正式な日です。正式な決め事を守っていくのは当然のことで、「こだわり」と言うのは少し違います。当たり前の事なんです。糸満ハーレーの日は、糸満市では今でも小中学校は休みになります。行政も理解しています。日曜日に開催するというのは、観光客や集客目当てです。糸満ハーレーは儲け主義じゃなく、神事ごとなのです。最近によく「なぜ旧暦にこだわるのか」と聞かれ、現代とのギャップを感じます。子供達に指導する場面でもすこし戸惑いを感じることもあります。昔に比べて、今は子供達が練習に集まりにくくなっていま



す。自分たちの時代と違って、塾や習い事に通っている子が多いからです。これは個人の将来や生活の話であるので、監督たちは当然認めています。時間になれば「塾にいきなさい」と言います。ただ本音を言うと、人数が欠けてしまえば、練習にならなくなるので、歯がゆい思いです。早く帰さなければならないから、練習後のコミュニケーションも取りにくくなります。

嘉数) 伝統と現代のギャップについて。先日、愛知県で4月6日に実施される東京五輪聖火リレーのうち、半田市を舟（ちんころ舟）で通行する一部コースが「男性限定」となっている事で批判の声が上がりました。舟は江戸時代から続く祭りで使われ、女人禁制のため乗船できるのは男性だけと決まっています。糸満ハーレーの本バーレーも漕ぎ手は男性と決まっています。批判の声を聴いたことはありますか。

与那嶺) 女性はなぜ本バーレーに出られないかというクレームは全く聞いたことがありません。ハーレーの神様は女性とされていて、リンチ（やきもち）することから舟を女性に触らせることもありません。漕ぎたいという女性は少年少女バーレーか、職域ハーレーで乗っています。これは伝統として続いてきたものだから、糸満の女性達は理解しているように思います。漕ぎ手になりたいと希望した女性がいると聞いたこともありません。もしいたら、各村や全村で考えると思います。前例がないのでわかりません。

